

中古日本語の動詞形態論

—動詞の語幹と接辞の分類と諸形式の形成の機序—

土井 康司* (岡山県立新見高等学校)

要旨

学校文法や各種分析に残されてきた中古日本語における動詞の語幹と接辞の分析に係る諸問題の解決を図った。命令形、終止形、否定形、使役形、受動形、連体形、已然形について、その動詞と接辞の連なり方を分析した。生成音韻論的分析手法を用いて、接辞に連なる形式を含む動詞の語幹について、それぞれの表層形と基底形、それらが連なる際の音韻規則を想定した。中古日本語の動詞の語幹と接辞の基底形は、その末尾の音素により5種類に、動詞の接辞や動詞の接辞に連なる接辞の基底形は、その先頭の音素により7種類に分類できた。動詞の語幹や接辞が基底形で連なるときに正しく表層形を生成するための音韻規則が明らかになった。その音韻規則には動詞の語幹や接辞の基底形における組合せに対して相補分布的に単純な削除規則を設定しさえすればよい。本稿の手続きを踏まえると、動詞の語幹と接辞の境界を厳密に規定できると明らかになった。

キーワード：中古日本語、形態論、語幹、形態音韻論、生成音韻論

1. はじめに

本稿の目的は中古日本語の動詞に係る形態論上の課題、特に語幹と接辞の分類と諸形式の形成の機序の本質を解明することにある。動詞とそれに下接する形態に関する新たな分析を試みる。動詞の形態論における、いわゆる「活用」についても再検討を行う。影山（2019：15）は「伝統文法の活用表には様々な問題が指摘されている」、「最も重大な問題は活用語尾と屈折語尾が混同され、どこまでが動詞の語幹で、どこからが屈折語尾なのかが判然としない点にある」と指摘している。本稿ではまさにその問題を判然と解決することを試みる。

2. 動詞とその後接要素についての先行研究

2.1. 学校文法・伝統文法

ここでは従来、中古日本語の動詞と後接する要素とがどう体系化されてきたか記す。まず

「活用」という概念に注目する。「活用とは、動詞や形容詞など、述語になる語がその機能に応じて形を変えること」であり「学校文法の活用の記述は、ひらがなを単位」とする（野田 2014 : 108）。学校文法では表 1 のような「活用表」を用いて動詞の「語幹」と「活用」が示される。（表 1 は『旺文社古語辞典〔第 10 版増補版〕』（松村ら（編）2015）を参考に作成した。）なお「語幹」列内の（）が附された動詞については上一段動詞であれば他に「見る」などがある。清瀬（2013 : 33）には現代語の一段動詞についての言及ではあるが「文法教科書の説明では、「見ル」の「ミ」は語幹ではなく活用語尾であり（或いは語幹と活用語尾との区別が無く）、「食ベル」の語幹は「タ」であると言う。しかし、すべての「活用形」に共通する部分は、「ミ」と「タベ」なのであるから、語幹は当然 mi- と tabe- でなければならない」と指摘されている。この考え方を踏まえると「来」と「為」についても「すべての「活用形」に共通する部分」を抽出すればそれぞれの語幹は k- と s- だと言える。「語幹と活用語尾との区別が無」とする「学校文法」の捉えには「どこまでが動詞の語幹」であるのかを判然とさせる上でも問題がある。

表 1 学校文法における古語の動詞活用表（活用型 9 種・活用形 6 種。）

活用型 (活用の種類)	古語の動詞		活用形					
	例語	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
四段	聞く	聞	か	き	く	く	け	け
上二段	起く	起	き	き	く	くる	くれ	きよ
下二段	受く	受	け	け	く	くる	くれ	けよ
上一段	着る	(着)	き	き	きる	きる	きれ	きよ
下一段	蹴る	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ
カ行変格	来	(来)	こ	き	く	くる	くれ	こ・こよ
サ行変格	為	(為)	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ行変格	往ぬ	往	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行変格	あり	あ	ら	り	り	る	れ	れ

2.2. 「活用」を認める文法——大木（2010）・宮岡（2015）

前述の分析の課題について「活用」という概念を維持しながら解決を図る研究としては例えば大木（2010）が挙げられる。「古代日本語の動詞がどのような形をもつのかということについては、これまで広く学校文法流の把握がおこなわれている」と述べつつも「しかしながら、そのような把握だけでは必ずしも十分であるとはいえない面がある」と指摘し「古代日本語、とくに平安時代における動詞の形態について、手続きを示しながら分析し、活用体系を記述している」。動詞の接辞を整理した上で「動詞と屈折接辞の関係、すなわち屈折体系＝活用体系を示す」とし日本語の古語の動詞の活用体系は表2のようになるという。大木（2010）にはいわゆる二段動詞の語幹の認め方についての議論がある。「「出づ」でいえば、id-と-ideの、「過ぐ」でいえば sug-と sugi-の二種類の語幹を認める考え方」は否定され「「出づ」類・「過ぐ」類の語幹は id-, sug-のような形ひとつを認めることにする」とされる。その理由は次の①～③のように挙げられる。①「基幹的要素としての語幹が、その末尾の形に応じていくつかの形があり（id-と idu-, あるいは sug-と sugu-のように）、そして、それに応じて文法的意味が異なる、というのであれば、やはり分析としてはあまり好首尾ではないといえる」から、②「-ru と -raru が異形態どうしであり、さらにそれぞれに -rar と -rare のような異形態を持つというのは相当に複雑な異形態群であるといえる」から、③「たとえば、「あく」「たつ」「つく」などを「自他の違いを屈折で表し分けていると考える」ことができるから。しかし、①とあるが2種類の語幹が異形態として特に文法的意味は異なるものだと見なしたら問題は解消されるのではないか。また、②とあるが異形態は前接語と後接語とに対してそれぞれある規則によって相補分布をなすのであれば「複雑」であっても特に問題ではないのではないか。更には、③の考え方は自他の違いを動詞の語幹の違いで表し分けると考えることと比べて、より本質的であると言えるのか。こうした疑問が生じるため二段動詞の語幹の認め方については更なる議論が必要だと言える。

また、宮岡（2015：164-165）は「動詞語幹には母音語幹（例，tabe-）と子音語幹（例，kak-）があり，それぞれ rV，V で拡張された語基（tabe-rV-，kak-V-）があり，これが「活用」の基となる。…接尾辞の一部は，母音語幹に直接つくが，子音語幹に直接つく接尾辞はない」とし，現代語についてだが「旧来の“活用形”は踏襲し（a [未然]，i [連用]，u [終止・連体]，e [假定・命令]，o [未然]），「する，くる」などの変格活用は考慮外とする」述べる（pp.223-224）（引用文中の…は中略を表す。以下同様。）。変格活用を極力例外にせずに体系中に位置づける議論が必要だと言える。

表2 大木（2010）による古語の動詞の活用体系（屈折体系）

	正格活用			変格活用				
	思ふ	出づ	過ぐ	見る	死ぬ	有り	来	為
語幹	omof-	id-	sug-	mi-	sin-	ar-	k-	s-
存在	u ₁	u	u	ru	u	i ₃	u	u
連体	u ₂	uru	uru	ru	uru	u ₂	uru	uru
条件	e ₁	ure	ure	re	ure	e ₁	ure	ure
命令	e ₂	eyo	iyo	yo	e ₂	e ₂	o ₁	eyo
成立	i ₁	e ₃	i ₁	∅	i ₁	i ₁	i ₁	i ₁
未実現	a	e ₄	i ₂	∅	a	a	o ₂	e ₄
	四段	下二段	上二段	上下一段	ナ変	ラ変	カ変	サ変

2.3. 「活用」を認めない文法——清瀬（2013）

清瀬（2013：5-23）はまず現代語の動詞語幹について次のように分析する。例えば「書かせる」「見させる」について，まず「書く」「見る」の動詞幹を‘kak-’，‘mi-’と認めた上で前者「子音幹には‘-aseru’の形が接尾」し後者「母音幹には‘-saseru’の形が接尾」しているとし，「書かせる」を「kak（子音幹）-~~s~~aseru」，「見させる」を「mi（母音幹）-saseru」と分析する。このとき「子音 s は，接尾辞が母音幹に後接する際にのみ現れ，子音幹に後接する際には消失するという性質を有し」，「この種の子音を連結子音」とする。「連結子音は，

母音で始まる接尾辞のみが有し」, 「接尾辞の語頭母音と母音幹の語末母音とを連結する役目を果す」という。そして「連結子音は括弧内に表記」し, 「使役を表す接尾辞は唯一在るのみであって, それは, -(s)aseru」だという。また「この種の接尾辞を動詞接尾辞」とする。また「書かない」「見ない」について, ‘kak-anai’, ‘mi-nai」と見て「kak (子音幹) - anai」, 「mi (母音幹) -anai」と分析する。ここで「子音幹動詞に後接する際, 其の語頭に母音 a が現れ, 且つ, 母音幹に後接する時には, 此の母音 a は現れない」ことに着目し「かかる性質を有する此の種の母音を連結母音」とし「連結母音も括弧内に表記」して「否定を表す動詞接尾辞」は「-(a)nai」という。「連結母音は, 子音で始まる接尾辞のみが有し」, 「接尾辞の語頭子音と子音幹の語末子音とを連結する」という。(当引用文中の ~~s~~, ~~a~~ は引用元では s, a にそれぞれ / を重ねて表現されているが本稿では便宜上, 文字に = を重ねて代用する。) その上で「古代語におけるも, 動詞の語構成は, 本質的に現代語動詞と変るところは無い」とし「語幹にも接尾辞にも「活用」は見られない。語幹にも, 同じく子音で終る子音語幹と母音で終る母音語幹とがある」という(清瀬 2013 : 185-213)。以上のことから清瀬 (2013) の日本語の古語の動詞の語幹の分類は表 3 のようになる。動詞の語幹はその末尾の音素と後接する接尾辞の形式により子音語幹 2 種, 母音語幹 5 種, 準母音語幹 1 種の計 8 種類に分類されている。この分類は「どこまでが動詞の語幹」なのかは明瞭である。

表 3 清瀬 (2013) による古語の動詞の語幹の分類

語幹の分類	子音語幹		母音語幹					準母音語幹
語幹末音素	子音		-i	-i	-ë	-ö	-e	-nØ
例	聞く	有り	見る	過ぐ	寝	来	為	死ぬ
語幹	kik-	ar-	mi-	sugi-	në-	kö-	se-	sinØ-

しかし黒木 (2015 : 37) はこの清瀬 (2013) に対する書評論文で「分節音レベルの分析に

基づく著者の動詞形態論を支持しているが、些末ながら、次の点には違和を感じる」として、清瀬（2013：269-289）の古語の分析に対して「腑に落ちないのは、(i) 「死ぬ」「往ぬ」における語幹末の-nは子音でありながら母音に準ずるものと認められるので、ゼロ形態の母音 Ø を附」（p.194）すという点と、(ii) i/e 幹以外の母音幹が-(r)‘連体’以外の母音字-(r)u…を取る際に語幹末母音を Ø にするという点である。更に、i/e 幹動詞や子音辞-(a)z-‘否定’の分析にも再考の余地があるように見える」（p.38）とし、黒木は「動作動詞語幹は、その語末音素から次の3種8類」すなわち、「a. 子音幹：子音幹，形状性 r 幹（学校文法による四段，ラ変） b. 母音幹：i/ë 幹，se 幹（同じく上/下二段，カ変，サ変） c. 混交幹：i/e(r)幹，n(u)幹（同じく上/下一段，ナ変）」だと分類する。「母音幹と混交幹は，u 持ち子音辞，ないし，-(r)arë-以外の r 持ち母音辞を取る際，その語幹末音素を交代させる。kö 幹と se 幹は，i 持ち子音辞を取る時もそうなる。そして，著者が-⁰(r)u…とする動作動詞接尾辞は，…-^u(u) …となる。上一段動詞語幹を i 幹と r 幹から成る i(r)幹とする評者の分析は，語幹末音素の交替を追加する分，i 幹とする著者のそれより経済性の面で劣る。しかし，所属語幹数の少なさを考慮すると，in(u)-‘往（ぬ）’と sin(u)-‘死（ぬ）’しかない n(u)幹のように，子音幹と母音幹が交替する混交幹とするのも，そう悪くはなかろう」という。ここからも古語のいわゆる二段，変格活用動詞の語幹についてより正確な分析が必要だと分かる。

2.4. 形態音韻文法——黒木（2012）

一方で，黒木（2012：114-115）によると日本語の古語の動詞の活用体系は表4のようになるという。黒木（2012）では清瀬（1971，前掲清瀬（2013：5-23）の初出）で提唱された分析の「経済性」を評価しているが「日本語の動詞…は活用しないというのが清瀬の主張である。ただし，この現象を活用と呼ぶか否かの問題に過ぎないから，無活用であるか否かと

いう問題は本質的ではない」といい「日本語の動詞の活用を形態音韻現象と見る清瀬は、語幹末尾音と接尾辞初頭音の組み合わせに着目して、文法を構築している。…このような文法を“形態音韻文法”と呼ぶ」(pp.108-111)とする。ここでは動詞の語幹はその末尾の音素と後接する接尾辞の形式により、子音型2種、母音型5種、混交型1種の計8種類に分類される。黒木(2012)は表4の「[2, 3, 6-8]」の動詞語幹は、これに後接する動詞接尾辞に合わせて交替する」とし、そのような動詞を「複語幹動詞」と呼ぶ。この表から「動詞接尾辞の異形態も、[F]以外では2種類に収まる。[4]上一段動詞語幹は8種類、[5]ラ変動詞語幹は4種類しかないから、前者に交接する-ruと後者に後接する-iを不規則形式と処理すれば(=個別に覚えれば)、[F]の異形態も2種類に収まる(cf. [F] -(u)∅~-ru~-i→-(u)∅)」ということが分かるという。

表4 黒木(2012)による古語の動詞の活用体系(形態音韻文法)

		子音型		母音型				混交型	
		[1]	[5]	[2]	[3]	[4]	[6]	[7]	[8]
		os- 押 (す)	ar- 有 (る)	age/u- 上げ (る)	oti/u- 落ち (る)	mi- 見(る)	ko/i/u- 来(る)	se/i/u- す(る)	sin(u)- 死(ぬ)
[A]	‘～せずに’	os-a.de	ar-a.de	age-de	oti-de	mi-de	ko-de	se-de	sin-a.de
[B]	‘～し’	os-i.∅	ar-i.∅	age-∅	oti-∅	mi-∅	ki-∅	si-∅	sin-i.∅
[C]	‘～しろ’	os-e	ar-e	age-jo	oti-jo	mi-jo	ko-jo	se-jo	sin-e
[D]	‘～すれ’	os-e	ar-e	agu-r.e	otu-r.e	mi-r.e	ku-r.e	su-r.e	sinu-r.e
[E]	‘～する’ 〈連体〉	os-u	ar-u	agu-r.u	otu-r.u	mi-r.u	ku-ru	su-r.u	sinu-r.u
[F]	‘～する’ 〈終止〉	os-u.∅	ar-i	agu-∅	otu-∅	mi-ru	ku-∅	su-∅	sinu-∅

2.5. 先行研究のまとめ

以上のことから、古語のいわゆる二段動詞、カ変、サ変、ナ変の語幹や否定の接辞につい

てその分析の結果は研究者により多種多様だと分かる。より合理的な分析を行うことが課題だと言える。次節以降の私見ではその課題の解決を試みる。

3. 私見——生成音韻論的分析手法を用いて

先行研究に残された課題を解決し、形態論・音韻論の観点から文法的概念を構築するべく本稿では表1に示した動詞について考察する。動詞のいわゆる活用形に後続する語を連ねたものの一覧を表5に示す。ここでは簡単のため終止形と命令形、已然形について文末の形式とする。なお、私見では音素のローマ字表記は上代特殊仮名遣いを意識しない。また、名詞や助詞の直前には記号=を附す。「来」の命令形については『精選版日本国語大辞典』（小学館国語辞典編集部（編）（2005））に「平安時代には「こよ」も見られるが、「こ」だけの方が優勢である」とあることに鑑み「こ」または「こよ」という意味で、ko(yo)と示す。

表5 動詞のいわゆる活用形に、後続する語を連ねたもの（古語）

いわゆる	活用形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	後続品詞	助動詞	助動詞		名詞		
	後続語例	否定「ず」	回想「けり」		「こと」		
四段	聞く	kikazu	kikikeri	kiku	kiku=koto	kike	kike
上二	起く	okizu	okikeri	oku	okuru=koto	okure	okiyo
下二	受く	ukezu	ukekeri	uku	ukuru=koto	ukure	ukeyo
上一	着る	kizu	kikeri	kiru	kiru=koto	kire	kiyo
下一	蹴る	kezu	kekeri	keru	keru=koto	kere	keyo
カ変	来	kozu	kikeri	ku	kuru=koto	kure	ko(yo)
サ変	為	sezu	sikeri	su	suru=koto	sure	seyo
ナ変	往ぬ	inazu	inikeri	inu	inuru=koto	inure	ine
ラ変	あり	arazu	arikeri	ari	aru=koto	are	are

村木（2014）によると「語幹」は「語形変化する単語のすべての語形にあらわれる部分」とされる。この定義に従えばこの表の行ごとに、ローマ字で示した音素排列の先頭から全

ての活用形に共通している音素列はそれぞれ動詞の「語幹」と言える。「語幹」を除外した残りの音素列は非「語幹」としておく。この表について、行ごとに「語幹」とそれ以外とを分離して、かつまた、非「語幹」の列ごとに、ローマ字で示した音素排列の末尾から全ての活用の種類（活用型）に共通している音素列の前に、-の記号を附し、一覧にすると表6のようになる。なお、村木（2014）による「語幹」の定義に従った私見における「語幹」は、丹羽（2012：48-50）が「語幹」の「核」として捉えている部分に相当するが、私見での「非「語幹」」は、丹羽（2012）が「語幹」の一部として捉える「接辞」と「語幹」の外部として捉える「文成立形式」とを区別して捉えたものを区別せずに指すものである。さて、非「語幹」の列にはローマ字で示した音素排列の末尾から全ての活用の種類（活用型）に共通している音素列が見いだせなかったものがある。〈終止〉と〈命令〉である。これ以降、〈〉で括った語句はその音素列の機能又は意味を表す形式を指すこととする。つまり、〈終止〉とは文を終止することを示すという機能を持つ形式を、〈命令〉とは文を終止することを示すとともに、ある対象にある動作等を命令するという機能を持つ形式のことを指す。

表6 動詞の「語幹」と非「語幹」の音素排列

活用型	語例	「語幹」	非「語幹」					
			否定	回想	終止	連体形+こと	已然形	命令
四段	聞く	kik	a-zu	i-keri	u	u=koto	e	e
上二	起く	ok	i-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	iyō
下二	受く	uk	e-zu	e-keri	u	ur-u=koto	ur-e	eyō
上一	着る	ki	zu	keri	ru	r-u=koto	r-e	yō
下一	蹴る	ke	zu	keri	ru	r-u=koto	r-e	yō
カ変	来	k	o-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	o(yō)
サ変	為	s	e-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	eyō
ナ変	往ぬ	in	a-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	e
ラ変	あり	ar	a-zu	i-keri	i	u=koto	e	e

さて、表6からは動詞の「語幹」と〈終止〉の非「語幹」の音素列との間に次の規則が見て

取れる。すなわち、「語幹」の末尾の音素が母音であれば、〈終止〉の非「語幹」の音素列は ru であるということである。「語幹」の末尾の音素が母音であるか否かの分類を考慮して表を整理すると表7のようになる。そこからは、動詞の「語幹」末の音素が母音でないとき、〈終止〉の非「語幹」の音素列は、その前接する動詞がいわゆる「ラ行変格活用動詞」（以下、ラ変）であれば i であり、その前接する動詞がいわゆるラ変でなければ u であるということも分かる。これ以降は議論の簡単のため、いわゆるラ変を除いた表で考察を進める。これは、いわゆるラ変と呼ばれる「あり」等について山田孝雄（1948：270-291）を踏まえ、筆者がこれらを動詞というよりむしろ「存在詞」として理解していることにもよる。従って、以降動詞というときは、いわゆるラ変動詞を除いたものの集合を指している。

本稿では「異形態が存在する時、共通する基底形を設定し、実際に出てくる形はこの基底形から派生されたと考える」（西山 2012：156）という生成音韻論の立場を取る。

表7 動詞の「語幹」と非「語幹」の排列（「語幹」末の音素に着目して）

活用型	「語幹」例	「語幹」末の音素	非「語幹」					
			否定	回想	終止	連体形+こと	已然形	命令
上一	ki	母音	zu	keri	ru	r-u=koto	r-e	yo
下一	ke		zu	keri	ru	r-u=koto	r-e	yo
四段	kik	非母音	a-zu	i-keri	u	u=koto	e	e
上二	ok		i-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ir-e	iyō
下二	uk		e-zu	e-keri	u	ur-u=koto	er-e	eyō
カ変	k		o-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	o(yō)
サ変	s		e-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	eyō
ナ変	in		a-zu	i-keri	u	ur-u=koto	ur-e	e
ラ変	ar		a-zu	i-keri	i	u=koto	e	e

そうすると表7に示した音素列 ru と u は「基底形から派生された」形（西山（2012）等にならない「表層形」と呼ぶもの）であるから基底形とそこから表層形を導くための音韻規則を仮定する必要がある。「日本語の音の基本は子音，母音，子音，母音，と続くパターンだ

が、語根と接尾辞が結合する際、子音の連続や母音の連続が出来てしまうことがある。この解消には4つの可能性がある。…母音削除、母音挿入、子音削除、子音挿入」だとする西山(2012)は古語の動詞の基底形から表層形への派生について「子音挿入を想定する研究者は少ない。…実はMcCawley(1968)以来、…子音削除が標準的な分析になっているが、古語の二段動詞を考慮すると…子音挿入の方が正しい」と前置きし次のように分析する。古語の「「過ぐ」(上二段)、「答ふ」(下二段)という終止形」について表層形が「sug-u, kotaf-uと分析される」とした上で「語根の部分は/sug/, /kotaf/のように子音で終わるのではなく、/sugi/, /kotafe/のように母音で終わる。この母音は未然形で出てくる(sugi-zu, kotafe-zu)」という。「もし終止形の語尾が/ru/なら、これが語根についたら/sugi-/ru/となる。この段階で子音や母音の連続は起こっておらず、そのまま現代語と同じ「過ぎる」という形になりそうだが、古語では「過ぐ」が正しい形だ。/sugi-/ru/からsug-uを得るには母音(i)と子音(r)の計2つを削除しなくてはならないが、通常このような音韻操作はない。この問題は、終止形の語尾を/u/とすると解決する」と指摘する。そして音韻操作は古語では「/sugi-/u/→母音削除→sug-u」、現代語では「/sugi-/u/→子音挿入→sugi-r-u」だとされる。「古語では語根の最後の母音が削除されるのに対し、現代語ではrが挿入されている」という。(引用者注:引用文中の語根とは、本稿の「語幹」とは異なる。語根は基底形における概念で、「語幹」は表層形における形式である。)この西山(2012)には、古語のいわゆる一段活用動詞についての言及はないが、現代語、古語を問わず「終止形の語尾を/u/とする」とあり、また、「現代語ではrが挿入されている」というのは現代語のいわゆる一段活用動詞はrが挿入されているということであることから、古語のいわゆる一段活用動詞についてもrの挿入がなされていると考えなければならなくなる。西山(2012)では、いわゆる二段活用動詞について上述のように未然形で出てくる形が語根とされる一方で、四段動

詞の「書く」の語根は kak, ナ変の「死ぬ」の語根は sin, カ変の「来」の語根は ku, サ変の「す」の語根は su とされる (西山 2012 : 165)。これによると派生の仕方は表 8 のようになる。このとき、語根の末尾の音素が母音であるか子音であるかが、表層形を派生する際に音韻操作をするか否かと対応していることが分かる。また、語根の末尾の音素が母音であれば、音韻操作として r 挿入をするか母音削除をするかは、その動詞がいわゆる一段動詞であるか否か (つまり、二段動詞, カ変又はサ変であるか) と対応する。西山 (2012) によると、終止形を形成するときの動詞語根と後接の形態素との連なりは、①語根の末尾の音素が子音であって音韻操作のないもの、②語根の末尾の音素が母音であって、母音削除のあるもの、③語根の末尾の音素が母音であって、r 挿入のあるものという 3 通りの場合があるということである。しかしながら、なぜ二段動詞については未然形ででてくる形を語根として、四段動詞では未然形ではない形を語根とするかについては述べられていない点には疑問が残る。他の活用形を分析する中で語根 (基底形) を再想定することができないか検討する必要がある。

語根 (語幹の基底形) を再想定するため、主に文終止を導く機能的な形式 (命令形・終止形), 意味的な接辞 (否定の接辞・使役の接辞・受動の接辞・回想の接辞) を導く形式, 名詞・助詞・接辞に連なる (機能的な) 形式 (連体形), あるいは、いわゆる係助詞「こそ」に呼応する文終止 (係結びの結び) を導く形式 (いわゆる已然形) について分析する。

表 8 動詞の終止形の基底形と表層形（西山（2012）を参考にした場合）

活用型	基底形		音韻操作	表層形	活用型	基底形		音韻操作	表層形
	語根の例	終止				語根の例	終止		
四段	/kak/	/u/	なし	kak-u	下二	/uke/	/u/	母音削除	uk-u
上一	/ki/		r 挿入	ki-r-u	ナ変	/sin/		なし	sin-u
下一	/ke/		r 挿入	ke-r-u	カ変	/ku/		母音削除	k-u
上二	/oki/		母音削除	ok-u	サ変	/su/		母音削除	s-u

3.1. 主に文終止を導く形式

3.1.1. 命令形

まず、表7に着目して、動詞の「語幹」と非「語幹」の音素の排列について、ラ変を除いて比べたときに、他の形式（否定形、回想形、終止形、連体形、已然形）では最末尾の音素が共通しているのとは異なり、非「語幹」の最末尾の音素が、eかoかの2種類に分類できる命令形に着目する。語幹の認定に際して、後述する他の形式との一貫性をより厳密に確保するために、本稿では次のような仮定の上に議論を進める。命令形は動詞の語幹に命令の意味・機能を持つ要素が連なったものであると仮定する。そのうえで終止形・連体形・連用形との対立は利用せず命令形にのみ着目して、語幹と接辞に分析する。こうした仮定のもと、語根を再想定する可能性を探りながら、命令形を形成するときの動詞語根と後接要素の連なりを分析し、まず「どこまでが動詞の語幹で、どこからが屈折語尾なのか」を判然とさせる。さて、表9に示した命令形は、ローマ字で示した音素排列の末尾に着目すると、「来」についてその命令形を便宜上 *koyo* として扱っても、2種類に分類できる。すなわち、末尾の母音が e であるものと、o であるものである。後者は、全て o の直前に y の音素を有している。また、e の直前には子音が現れており、yo の直前には母音 (i/e/o) が現れている。もっとも、四段活用動詞については活用型の「行」の別によって（末尾の）e の直前の子音は

様々な音素をとることを注意しておく（例：聞け kike, 脱げ nuge, 流せ nagase, 待て mate, 惑へ madofe, 遊べ asobe, 読め yome, 散れ tire, 切れ kire, 放れ fire, 入れ ire）。ここで、動詞の命令形という形は、動詞の語幹の末尾が子音であれば e という音素が現れていて、動詞の語幹の末尾が母音であれば yo という音素列が現れているという規則を仮定することができる。筆者はこれらの e や yo を「命令形形成接辞」（略して「命令の接辞」）と呼ぶことにする。動詞の命令形という形から命令形形成接辞を除いた部分を表層形における語幹と呼ぶ。命令形の語幹（表層形）は、語幹の基底形と同じ音素列を有するものと仮定する。この語幹には命令形形成接辞以外の接辞も後接するものとして仮定する。語幹の基底形を「語幹基」といい、接辞の基底形を「接辞基」ということにする。西山（2012）の「語根」は本稿の「語幹基」に相当する。語幹基の末尾の音素が母音であるものを「母音幹基動詞語幹基」略して「母音幹基」、語幹基の末尾の音素が子音であるものを「子音幹基動詞語幹基」略して「子音幹基」とする。なお、（表層形の）語幹の末尾の音素が母音であるものを「母音幹動詞語幹」略して「母音幹」、語幹の末尾の音素が子音であるものを「子音幹動詞語幹」略して「子音幹」としておく。（想定される）語幹基と接辞基とが連なり、（想定される）音韻操作が施されることで、（実測される）表層形（語幹-接辞）が現れるとすると、基底形はいかなる音素列を有していても構わないが、より単純な音韻操作（規則）で表層形を出力できる音素列にしておくことが望ましい。また、規則を表記する際、動詞について、語幹基の末尾の音素が母音であれば、/ \sim V/, 子音であれば、/ \sim C/ とする。符号 \sim は任意の音素列を現すが、一般的に音素列 / \sim V/ でも、音素列 / \sim C/ でも、 \sim 部はどちらの音素列も子音と母音とが交互に排列されたものであるということを前提としておく。その上で、本稿においては、表層形同士で共通する末尾音素をもつ形態素については、共通する基底形から派生して表層形を成すと考え、表層形同士には共通する末尾音素をもたない形態素については、

異なる基底形から派生して表層形を成すと考えることにする。以上の仮定を踏まえ、子音語幹動詞に後接する命令形接辞 *e* と母音語幹動詞に後接する命令形接辞 *yo* の間には、共通する末尾音素がないことから、筆者は命令形形成接辞基（略して「命令の接辞基」）として子音語幹動詞専用の */e/* と母音語幹動詞専用の */yo/* という形態素を仮定する。このとき (1) の規則が成り立つ。この規則に基づき動詞の命令形の基底形と表層形の一覧を表 10 に示す。

表 9 動詞の命令形

活用型	動詞	命令形	活用型	動詞	命令形	活用型	動詞	命令形
カ行四段	聞く	kike	カ行上一	着る	kiyo	サ行変格	為	seyo
カ行上二	起く	okiyo	カ行下一	蹴る	keyo	ナ行変格	往ぬ	ine
カ行下二	受く	ukeyo	カ行変格	来	ko(yo)			

(1) 動詞が〈命令〉の機能を果たすときの音素列

a. 母音幹基-命令の接辞基： $/\sim V/-/yo/\rightarrow\sim V-yo$ ：母音幹-命令の接辞

b. 子音幹基-命令の接辞基： $/\sim C/-/e/\rightarrow\sim C-e$ ：子音幹-命令の接辞

表 10 動詞の命令形の基底形と表層形

		命令形（基底形）			命令形（表層形）	
活用型	動詞	語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	子音	/e/	in	e
四段	聞く	/kik/			kik	
上二	起く	/oki/	母音	/yo/	oki	yo
下二	受く	/uke/			uke	
上一	着る	/ki/			ki	
下一	蹴る	/ke/			ke	
カ変	来	/ko/			ko	
サ変	為	/se/			se	

この表は、便宜上、いわゆる「ナ変」の行を最上段に移動している。この表のように捉えることで、動詞の活用型がいずれの型であっても、語幹の基底形（語幹基）の想定の仕事に一貫性を持たせることができた。ここまでの分析は、動詞「来」の命令形を便宜上 *koyo* としてきたが、*ko* とした場合は、どう捉えるべきだろうか。このとき規則 (1)、表 10 は規則

(2) , 表 11 のように修正する必要性が生じる。すなわち, 命令形形成接辞基 (略して「命令の接辞基」) として, 子音語幹動詞専用の /e/, 母音語幹動詞 (「来」以外) 専用の /yo/, 「来」専用の /Ø/ という形態素を仮定することができる。この表 11 は, 便宜上, いわゆるカ変の行を最下段に移動している。これ以降は「来」の命令形は ko と表記する。

(2) 動詞が〈命令〉の機能を果たすときの音素列 (改)

a. 母音幹基 (「来」を除く) -命令の接辞基 : /~V/-/yo/ → ~V-yo : 母音幹-命令の接辞

例外) 母音幹基 (「来」) -命令の接辞基 : /~V/-/Ø/ → ~V-Ø : 母音幹-命令の接辞

b. 子音幹基-命令の接辞基 : /~C/-/e/ → ~C-e : 子音幹-命令の接辞

表 11 動詞の命令形の基底形と表層形 (改)

活用型		命令形 (基底形)			命令形 (表層形)	
		語幹基	語幹基末	接辞基	語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	子音	/e/	in	e
四段	聞く	/kik/			kik	
上二	起く	/oki/	母音 (i/e)	/yo/	oki	yo
下二	受く	/uke/			uke	
上一	着る	/ki/			ki	
下一	蹴る	/ke/			ke	
サ変	為	/se/			se	
カ変	来	/ko/	母音 (o)	/Ø/	ko	Ø

3.1.2. 終止形

福田 (2019 : 121-143) は中古語の終止形を含めた分析において, 「話者が, 命題が真である蓋然性を 1 と判断する叙法 (すべて非接続叙法形式によって表される) のうち, 命題の時 (=観察可能時。……) を時間軸上に定位しないものを〔確言〕とする。確言は句接辞-u によって表される」とし, 「確言の句接辞 {-u : /-u⁽¹⁾ /~/ -u⁽²⁾ /~/ -e/~/ -i/~/ -る⁽¹⁾ /~/ -る⁽²⁾ /~/ -れ/~/ -φ/~/ -し/~/ -き/~/ -けれ} の異形態」の分布を示すが「-u の諸形態は同一語の

異形態と見ることができ、それらの選択は言語慣習によるものであったと考えられる」とする点にはその「言語慣習」とは何なのか疑問が残る。異形態の処理とその動機づけを解明し、その形式の形成の機序を明らかにする必要がある。

本稿では、動詞の命令形の分析で得た語幹基を基に終止形の基底形と表層形を分析し直す。命令形の分析で得た語幹基を基にするのは、命令形の形成の機序が、後述する他の形式の形成の機序と異なり最も単純、つまり、基底形から表層形を派生する過程で音韻操作が必要ないからである。ところで、清瀬（2013：186-187）は「諸種の膠着語のうち、日本語と同様に接尾辞によってのみ膠着性を示すアルタイ諸言語は、語幹そのものが命令形としても機能し、同じ性質のウラル諸言語においては、語幹に一定の文法接尾辞を添えて命令形を作る事」に言及し、「日本語もこの点は全く同様であって、動詞の語幹はすべて命令形に示されているのである。この事は、日本語がウラル・アルタイ諸言語と系統的に関係があると言う事ではなく、これらの諸言語が日本語との構造的平行性を示し、語構成を形態論的に良く示唆するという事に過ぎない」と述べている。具体例としては、ツングース諸語で膠着語であるホジェン語とシベ語とを挙げておこう。李（2021：I, 48-65）ではホジェン語の「命令形の作り方は2種類あり」、「1つは動詞の後に-ru という命令を表す接尾辞をつけて作り」、「もう1つは英語のように裸の動詞語幹だけで作」とされている。例として「təru! トゥル 座りなさい!」「tə! トゥ 座りなさい!」が示されている。また、児倉・久保（2021：II, 72-91）では、シベ語の「命令は動詞の語幹単独の形で表わされ」るが「一部の動詞は命令形が不規則にな」とされている。「語幹単独の形で表わされ」る語の例として、「gene- 行く → gene [グェ] 行け」、「qoqtu- 混ぜる → qoqtu [コクトゥ] 混ぜろ」が示されている。これら膠着語における言語的事実に照らすと、動詞の命令形の分析で得た語幹基を基に他の形式の基底形と表層形を分析し直すことの妥当性は一層強化される。

さて、接辞の形態や音韻操作の差異を踏まえ前掲の表 11 から行を一部並べ替えると表 12 のようになる。表層形の終止形接辞の形態が **u** と **ru** であり、これは、形態素末尾の音素が共通するものであるから、共通の接辞基 /**ru**/ を想定し、派生のための母音削除を規定する。この音素削除は、子音連続や母音連続を避けるための妥当な音韻操作として想定する。

ここで、いわゆる二段動詞と一段動詞とが基底形において、同じ音素列 /**~i**/-**r**/ 又は /**~e**/-**r**/ を持っているにも関わらず、削除される /**~i**/-**r**/, /**~e**/-**r**/ (二段動詞に関わる形式) と削除されない /**~i**/-**r**/, /**~e**/-**r**/ (一段動詞に関わる形式) とがあることが分かる。また、音韻操作は、①操作なし、②**r** 削除、③**ir** 削除、④**er** 削除、⑤**or** 削除という 5 通りになるが、②~⑤は全て共通して (接辞基の) **r** を削除するという操作を含んでいること、また、②の操作の起きるのはその前接の語幹基の末尾の音素が子音であり、③~⑤の操作の起きるのはその前接の語幹基の末尾の音素が母音であることに着目し、③~⑤は、一旦③' (i/e/o) **r** 削除としてまとめ、更に (i/e/o) を (**x**) と置換し、更に **x** は音素を有する場合、いずれも母音であるため **V** と置換すると、③~⑤を③" (**V**)**r** 削除という操作にまとめられる。**r** 削除又は (**V**)**r** 削除という操作によって削除されうる接辞基の音素 **r** を () で括り、また、(**V**)**r** 削除という操作によって削除されうる語幹基の音素を () で括ると表 13 が書ける。ここで、(**V**)**r** 削除という操作によって削除される語幹基の音素 (i/e/o) というのは、命令形の語幹には現れて終止形の語幹には現れないという振る舞いを見せることが分かる。この性質を踏まえて (**V**)**r** 削除という操作によって削除されうる語幹基の音素 (i/e/o) を「潜母音」とし、語幹基の末尾の音素が潜母音であるならば、/**~**(**V**)/ と現すことにする。このとき規則 (3) が成り立つ。この分析によると、西山 (2012) には見られた、「二段活用動詞」については未然形でてくる形を語根としながら「四段活用動詞」では未然形ではない形を語根とするという問題は生じない。語根の想定仕方として動詞の活用型に関わらず一貫性を持たせることが

できた。また、いわゆる「終止形接続」の助動詞（の終止形）は、現在推量の「らむ」は/-(r)uramu/, 推定の「らし」, 「めり」はそれぞれ/-(r)urasi/, /-(r)umeri/, 伝聞・推定の「なり」は/-(r)unari/, 当然の「べし」は/-(r)ubesi/, 打消推量の「まじ」は/-(r)umazi/ と分析できるが、いずれも、基底形が/(r)u~/ (~は音素列) という形式をとっていて、終止の接辞（基）と同様の規則を適用できる。これらは「ru系接辞基」と呼ぶことにする。このように、音素挿入を想定することなく音素削除の規則を想定するだけで、表層形としての音素列を正しく派生することのできる基底形を仮定できることが分かった。

表 12 動詞の終止形の基底形と表層形（改）

		終止形（基底形）		音韻操作 終止派生時	終止形（表層形）	
活用型	動詞	語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/ru/	r 削除	in	u
四段	聞く	/kik/			kik	
上二	起く	/oki/			ok	
下二	受く	/uke/			uk	
サ変	為	/se/			s	
カ変	来	/ko/		k		
上一	着る	/ki/		ki	ru	
下一	蹴る	/ke/	ke			

表 13 動詞の終止形の基底形と表層形（改）その 2

		終止形（基底形）		音韻操作 終止派生時	終止形（表層形）	
活用型	動詞	語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/(r)u/	r 削除	in	u
四段	聞く	/kik/			kik	
上二	起く	/ok(i)/			ok	
下二	受く	/uk(e)/			uk	
サ変	為	/s(e)/			s	
カ変	来	/k(o)/		k		
上一	着る	/ki/		ki	ru	
下一	蹴る	/ke/	ke			

(3) 動詞が〈終止〉の機能を果たすときの音素列

- a. 母音幹基-終止の接辞基： $/\sim V/-(r)u/\rightarrow\sim V\text{-ru}$ ：母音幹-終止の接辞
- b. 潜母音幹基-終止の接辞基： $/\sim(V)/-(r)u/\rightarrow(V)r$ 削除 $\rightarrow\sim C\text{-u}$ ：子音幹-終止の接辞
- c. 子音幹基-終止の接辞基： $/\sim C/-(r)u/\rightarrow r$ 削除 $\rightarrow\sim C\text{-u}$ ：子音幹-終止の接辞

ここで、先に引用した西山（2012）では「 $/sugi/-/ru/$ から $sug\text{-}u$ を得るには母音（i）と子音（r）の計2つを削除しなくてはならないが、通常このような音韻操作はない」とあるが、その一方で、井上（1998：15-25）は、現代日本語に見られるいわゆる「一段活用動詞」の可能表現における「ラ抜きことば」についての説明において、「ラ抜きことば」の「きっかけ」として「室町時代に出た「読む」「読めた」のような言い方が先祖だといわれる」表現で、今日専ら「可能動詞」とされる「五段活用動詞」の可能表現について、例えば「読む」の「終止形」が「 $yom\text{-}u$ 」、従来の「受け身・可能」表現が「 $yom\text{-}ar\text{-}eru$ 」、新しい可能形が「 $yom\text{-}eru$ 」であることに注目した上で、「一段活用動詞」や「五段活用動詞」を含む「すべての動詞で同方向の変化があったのだという論理で、まとめて扱おうとする」と、「ラ抜きことば」は「むしろ、「ar抜き（アル抜き）」と呼ぶ方がいい」と指摘している。本稿においては、この「ar抜き」は音韻操作としての「ar脱落」と捉え直すことができるため、「ar抜き」の存在は、母音と子音を共に脱落させる音韻操作を仮定することの妥当性を強化すると考える。

ここで、本稿では中古日本語における共時的で抽象的な音韻操作を論じているにもかかわらず、他の時代に起こった通時的で具体的な言語変化を持ち込んでいるのではないかという批判が生じるかもしれないが、本稿はあくまでも、「可能動詞」とされる一部の「五段活用動詞」の「ar抜き」の表現は、「室町時代」なら「室町時代」に起きたもので、「ラ抜きこ

とば」とされる一部の「一段活用動詞」の「ar 抜き」の表現は、「近現代」なら「近現代」に起きているもの、つまり、その時々、それぞれ共時的な音韻操作としての「ar 抜き」を経た結果として現れたものであると捉える。したがって、通時的な変化という巨視的視座は、共時的な変異を積み重ねた結果として得られるものであると考えている。

それゆえ、「室町時代」においても「近現代」においても、すでに表層形において生じている「ar 脱落」と呼べる言語的事象が存在する以上、それと性質を共にする、母音と子音を共に脱落させる音韻操作が、「平安時代」においては無かったとか、文法的抽象であり論理的に妥当な仮定の求められる基底形のレベルにおいてさえ無いとは言い切ることはできないのである。よって、本稿の母音と子音を共に脱落させる音韻操作の仮定は言語的事象に矛盾しない妥当なものである。

3.2. 意味的な接辞を導く形式

3.2.1. 否定の接辞

動詞に否定の接辞の附したもの（動詞の「否定形式」という。）の終止形は、表 14 のような音素列を示す。なお、筆者はここでいわゆる「未然形」という用語は用いない。というのも伝統文法では「未然形+打消（又は使役又は受身）の助動詞」として分析されていた形式について本稿ではそれぞれ、動詞の語幹基と否定（又は使役又は受身）の接辞基が連なり、語幹と接辞の表層形が現れると考えており、その際にも「未然形」という概念はもはや必要がないからである。なお、上述の清瀬（2013）の議論でも「連結子音」と「連結母音」とが提唱された際に「世に「未然形」と称せられている形は、もはや其の存在意義を失ったものと言って良い」とされている。しかしながら、本稿では「異形態が存在する時、共通する基底形を設定し、実際に出てくる形はこの基底形から派生されたと考える」（西山

2012) という生成音韻論の立場を取り、「連結音」を仮定せず「未然形」も認定しないという立場を取る。なお、西山(2012)では「未然形」について「今後の課題」とされている。

動詞の命令形の分析で得た語幹基は終止形の分析の際に修正を施した。動詞の否定の接辞については終止形の分析で改めて得た語幹基を活かして考える。終止形形成接辞基(終止の接辞基)は/(r)u/であり、表層形の接辞は、前接の語幹基の末尾の音素について子音であれば/u/、母音であれば/ru/である。ここで、前接の要素が語幹基であるときだけでなく、前接の要素が接辞基であるときについても、同様に、前接要素の末尾の音素について子音であれば/u/、母音であれば/ru/であるということが成り立つと仮定する。このとき表14の「否定-終止形」列のuは終止の接辞と考えられる。ここで表層形の否定の接辞はz又はazであるから、基底形の否定の接辞基を/az/として否定の接辞基に施されうる音韻操作を(接辞基の)a削除とし、/az/のaは環境によっては削除されうることを示すため()で括る(表15)。ここでの語幹基の()という符号については、終止形形成に関わる「(V)r削除」という操作によって削除される語幹基の音素を()で括ったのであるからa削除という操作においては何ら意味を持たないということに留意した上で規則(4)が成り立つ。また、いわゆる「未然形接続」の助動詞(の終止形)は、使役の「しむ」は/-(a)simu/、推量「む」、
「むず」はそれぞれ/-(a)mu/、/-(a)muzu/、打消推量の「じ」は/-(a)zi/、反実仮定の「まし」は/-(a)masi/、希望の「まほし」/-(a)mafosi/と分析でき、いわゆる「未然形接続」の助詞は、順接仮定の「ば」は/-(a)ba/、打消接続の「で」は/-(a)de/と分析できるが、いずれも基底形が/(a)~/(~は音素列)という形式を取り否定の接辞(基)と同様の規則を適用できる。これらを「a系接辞基」と呼ぶことにする。

なお、いわゆる助詞といわれる助動詞に係る詳細な分析は別項にて論じる。このことは以降の各形式におけるものについても同様である。

表 14 動詞の「否定形式」の終止形（「否定-終止形」と表す）

活用型	動詞	否定-終止形	活用型	動詞	否定-終止形
四段	聞く	kikazu	カ変	来	kozu
上二	起く	okizu	サ変	為	sezu
下二	受く	ukezu	ナ変	往ぬ	inazu
上一	着る	kizu	(ラ変)	(あり)	(arazu)
下一	蹴る	kezu			

表 15 動詞の否定-終止形の基底形と表層形

		否定-終止形（基底形）			音韻操作 否定派生時・ 終止派生時	否定-終止形（表層形）		
活用型	動詞	語幹基	否定の 接辞基	終止の 接辞基		語幹	否定の 接辞	終止の 接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/(a)z/	/(r)u/	なし・r 削除	in	az	u
四段	聞く	/kik/				kik		
上二	起く	/ok(i)/			a 削除・r 削除	oki	z	
下二	受く	/uk(e)/				uke		
サ変	為	/s(e)/				se		
カ変	来	/k(o)/				ko		
上一	着る	/ki/				ki		
下一	蹴る	/ke/				ke		

(4) 動詞の〈否定〉の意味を現すときの音素列

- a. 母音幹基-否定の接辞基：/~V/-/(a)z/→a 削除→~V-z-：母音幹-否定の接辞
- b. 潜母音幹基-否定の接辞基：/~(V)/-/a)z/→a 削除→~V-z-：母音幹-否定の接辞
- c. 子音幹基-否定の接辞基：/~C/-/(a)z/→~C-az-：子音幹-否定の接辞

3.2.2. 使役の接辞

動詞の使役の接辞が後ろに命令の接辞を取るとき表 16 のような音素列を示す。動詞の語幹基を想定する際、動詞の命令形の形に基づいたことを踏まえ、使役の接辞基を想定するためにも、そのいわゆる使役の助動詞の命令形の形式 *saseyo* をもとにする。したがって使役の接辞に後接する（表層形の）命令の接辞は *yo* であり、*yo* の直前の音素は使役の接辞の持つ音素となり、動詞に使役の接辞の附したもの（動詞の「使役形式」という。）の命令形は表

層形として *kik-ase-yo* や *oyi-sase-yo* と分析される (表 17)。これを見れば動詞の語幹末が子音であるとき使役の接辞は *ase* であり、動詞の語幹末が母音であるとき使役の接辞は *sase* となっていることが分かることから、基底形において、使役の接辞基は子音語幹基に後接する際に、*s* 削除という音韻操作が行われると仮定できる。また、使役の接辞に終止の接辞が後接した場合を考える。終止の接辞は、子音幹に後接するとき *u* で、母音幹に後接するとき *ru* であり、終止の接辞基は */(r)u/* と仮定していたことから表層形の分析は表 18 のようになる。表 18 を見れば動詞の語幹末が子音であるとき使役の接辞は *as* であり、動詞の語幹末が母音であるとき使役の接辞は *sas* となっていると分かる。動詞の使役形の命令形を分析したとき使役の接辞は *ase* であり、動詞の語幹末が母音であるとき使役の接辞は *sase* であったことを踏まえると、後接する接辞によって、*sas* 又は *as* の直後に *e* が現れているか削除されているかが決まるということである。これは終止の接辞基 */(r)u/* が基底形から表層形に派生するときの *(V)r* 削除の適否の結果である。よって、使役の接辞はそれに適用されうる音韻操作つまり接辞基の *s* 削除と *(V)r* 削除で削除される音素をそれぞれ () で括って */(s)as(e)/* と表現できる (表 19)。そして規則 (5) が成り立つ。

表 16 動詞の「使役形式」の命令形 (「使役-命令形」と表す)

活用型	動詞	使役-命令形	活用型	動詞	使役-命令形
四段	聞く	<i>kikaseyo</i>	下一	蹴る	<i>kesaseyo</i>
上二	老ゆ	<i>oyisaseyo</i>	カ変	来	<i>kosaseyo</i>
下二	捨つ	<i>sutesaseyo</i>	サ変	見物す	<i>kenbutusesaseyo</i>
上一	着る	<i>kisaseyo</i>	ナ変	死ぬ	<i>sinaseyo</i>

表 17 動詞の使役-命令形 (形態素境界明示)

活用型	動詞	使役-命令形	活用型	動詞	使役-命令形
四段	聞く	<i>kik-ase-yo</i>	下一	蹴る	<i>ke-sase-yo</i>
上二	老ゆ	<i>oyi-sase-yo</i>	カ変	来	<i>ko-sase-yo</i>
下二	捨つ	<i>sute-sase-yo</i>	サ変	見物す	<i>kenbutuse-sase-yo</i>
上一	着る	<i>ki-sase-yo</i>	ナ変	死ぬ	<i>sin-ase-yo</i>

表 18 動詞の「使役形式」の終止形（「使役-終止形」と表す）

活用型	動詞	使役-終止形	活用型	動詞	使役-終止形
四段	聞く	kik-as-u	下一	蹴る	ke-sas-u
上二	老ゆ	oyi-sas-u	カ変	来	ko-sas-u
下二	捨つ	sute-sas-u	サ変	見物す	kenbutuse-sas-u
上一	着る	ki-sas-u	ナ変	死ぬ	sin-as-u

表 19 動詞の使役-終止形の基底形と表層形

		使役-終止形（基底形）			音韻操作	使役-終止形（表層形）		
活用型	動詞	語幹基	使役の接辞基	終止の接辞基	使役派生時・終止派生時	語幹	使役の接辞	終止の接辞
ナ変	死ぬ	/sin/	/(s)as(e)/	/(r)u/	s 削除・(V)r 削除	sin	as	u
四段	聞く	/kik/				kik		
上二	老ゆ	/oy(i)/			oyi			
下二	捨つ	/sut(e)/			sute			
サ変	見物す	/kenbutus(e)/			kenbutu-se			
カ変	来	/k(o)/			ko			
上一	着る	/ki/			ki			
下一	蹴る	/ke/			ke			
					なし・(V)r 削除			

(5) 動詞の〈使役〉の意味を現すときの音素列

- a. 母音幹基-使役の接辞基： $\sim V / -(s)as(e) / \rightarrow \sim V-sas(e)-$ ：母音幹-使役の接辞
- b. 潜母音幹基-使役の接辞基： $\sim (V) / -(s)as(e) / \rightarrow \sim V-sas(e)-$ ：母音幹-使役の接辞
- c. 子音幹基-使役の接辞基： $\sim C / -(s)as(e) / \rightarrow s$ 削除 $\rightarrow \sim C-as(e)-$ ：子音幹-使役の接辞

3.2.3. 受動の接辞

動詞に受動の接辞が附したもの（動詞の「受動形式」という。）についても、動詞の使役の接辞と同様な手法で分析すると動詞に受動の接辞が附したものは表 20 のように分析できる。なお、受動の接辞基は、子音語幹基に後接する際に、r 削除という音韻操作が行われると仮定できる。そして、規則 (6) が成り立つ。ここで、使役の接辞に係る規則 (5) と受動の接辞に係る規則 (6) とはそれぞれ接辞基先頭の音素が子音 (consonant) であるから使

役の接辞と受動の接辞とを「C系接辞」と呼ぶことにする。

表 20 動詞の受動-終止形の基底形と表層形

活用型	動詞	受動-終止形 (基底形)			音韻操作 受動派生時・ 終止派生時	受動-終止形 (表層形)		
		語幹基	受動の 接辞基	終止の 接辞基		語幹	受動の 接辞	終止の 接辞
ナ変	死ぬ	/sin/	/(r)ar(e)/	/ru/	r 削除・ (V)r 削除	sin	ar	u
四段	聞く	/kik/				kik		
上二	強ふ	/sip(i)/			なし・ (V)r 削除	rar	sipi	
下二	逃ぐ	/nig(e)/					nige	
サ変	為	/s(e)/					se	
カ変	来	/k(o)/					ko	
上一	着る	/ki/					ki	
下一	蹴る	/ke/					ke	

(6) 動詞の〈受動〉の意味を現すときの音素列

- a. 母音幹基-受動の接辞基 : /~V/-/(r)ar(e)/→~V-rar(e)- : 母音幹-受動の接辞
- b. 潜母音幹基-受動の接辞基 : /~(V)/-/(r)ar(e)/→~V-rar(e)- : 母音幹-受動の接辞
- c. 子音幹基-受動の接辞基 : /~C/-/(r)ar(e)/→r 削除→~C-ar(e)- : 子音幹-受動の接辞

3.2.4. 回想の接辞

動詞に回想の接辞が附したもの（動詞の「回想形式」という。）とは学校文法ではいわゆる動詞の連用形に回想（過去）の助動詞「けり」が後接したものとして捉えられてきたものである（表 21）。しかしながら、清瀬（2013 : 190）の派生文法の枠組みでは「回想（retrospective）を表す派生語幹を作る-(i)ker-【けり】」という接辞が抽出されている。なお、学校文法におけるいわゆる連用形接続の「けり」終止形が、派生文法では-(i)kerの後ろに形状動詞接尾辞-(s)iが後接したものとして分析されている（清瀬 2013 : 208）。「子音語幹に接尾する際にのみ顕在し、母音語幹に接尾して潜在する母音」を「連結母音」としている清瀬（2013）の論では、-(i)kerの(i)は、「連結母音」ということになる。もともと、本稿

では、基底形から表層形へ派生すると考え、その派生には削除規則のみを仮定するため、表層形で現れないことのある *i* をあえて「連結母音 *i*」とは呼ばない。従って「連結音」は採用しない。だが、回想の接辞は、表層形において基本的に、子音語幹に後接するときは *iker* であり、母音語幹に後接するときは *ker* という形を表しているという分析を行う点については、本稿は清瀬（2013）と見解を同じくする。本稿では基底形 /*(i)ker/* を想定し、ある条件で *i* が削除されていると捉え、回想形ひいてはいわゆる連用形接続の語の分析を行う。まず、すでに想定した動詞の語幹基と接辞基 /*(i)ker/* と /*i/* とを並べた音素列にどのような音韻操作が施されたなら表 21 のような表層形が現れるかということを考える。音韻操作は表 22 のようなものを想定できる。なお、表 22 では、「*i* 削除」の起きる動詞語幹の行をまとめ、いわゆる「サ変」、「カ変」、「上二」と「下二」の位置を表 20 等からは変更している。また、回想の接辞と終止の接辞との間に関わる音韻操作は本稿では言及しないため、その音韻操作と終止の接辞 /*i/* は省略した。

表 21 動詞の「回想形式」の終止形（「回想-終止形」と表す）

活用型	動詞	回想形	活用型	動詞	回想形
四段	聞く	kikikeri	下一	蹴る	kekeri
上二	起く	okikeri	カ変	来	kikeri
下二	受く	ukekeri	サ変	為	sikeri
上一	着る	kikeri	ナ変	往ぬ	inikeri

表 22 動詞の「回想形式」の基底形と表層形

活用型		回想形式 (基底形)		音韻操作 回想派生時	回想形式 (表層形)	
		語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/(i)ker/	なし	in	iker
四段	聞く	/kik/			kik	
サ変	為	/s(e)/			(語幹基の) e 削除 s	
カ変	来	/k(o)/			(語幹基の) o 削除 k	
上二	起く	/ok(i)/		(接辞基の) i 削除	oki	ker
下二	受く	/uk(e)/			uke	
上一	着る	/ki/			ki	
下一	蹴る	/ke/			ke	

※語幹基の (i) 又は (e) は (V)_r 削除によって削除される音素を示していることに留意

これまで、終止形の形成のときの音韻操作で削除される語幹基の母音のことを (V)_r 削除で削除される音素として「潜母音」と呼んできた訳だが、回想形式の形成のときの音韻操作で削除される語幹基の母音 (o と e) は潜母音と区別する必要が生じた。そこで、これらの語幹基の母音 (o と e) を新たに「重潜母音」と呼ぶ。「重潜母音」は (()) で括って表す。ここで、「重潜母音」のみを削除する音韻操作を「((V))削除」と定義する。これに併せて、(V)_r 削除は「潜母音」と「重潜母音」ともに削除するものとして再定義する。そして、((V)) 削除は、i 削除の前に施される必要があるものとする。((V)) 削除が起きると i 削除が必要なくなるため、/(i)ker/ の i は残ったまま表層形となるからである。以上を踏まえ、表 22 は表 23 に改められる。また、回想形式の表層形は、基底形の境界に基づいて、表 23 「回想形式 (表層形)」列 (「語幹-接辞」列) のように分析できる。そして、規則 (7) が成り立つ。また、いわゆる「連用形接続」の助動詞 (の終止形) は、過去の「き」は /-(i)ki/、完了の「つ」、 「ぬ」、 「たり」はそれぞれ /-(i)tu/、 /-(i)nu/、 /-(i)tari/、過去推量の「けむ」は、 /-(i)kemu/、希望の「たし」は、 /-(i)tasi/ と分析でき、また、いわゆる「連用形接続」の助詞は、例えば単純接続の「て」は、 /-(i)te/、反復・継続の「つつ」は、 /-(i)tutu/ と分析でき、いずれも、基底形が/(i)~/ (~は音素列) という形式を取り、回想の接辞 (基) と同様の規則

を適用できる。これらを「i系接辞基」と呼ぶ。なお、いわゆる「連用中止法」については動詞語幹に〈中止〉の接辞基 /-(i)/ が連なったものと捉え「i系接辞基」に含めることとする。なお、/-(i)/ について清瀬（2013）は「連結母音のみから成る動詞接辞」とするが、筆者は前述の通り「連結音」自体の想定はなくなったと考える。〈中止〉の接辞基 /-(i)/ はあくまでも基底形の形式なのである。

表 23 動詞の回想形式の基底形と表層形（改）

活用型		回想形式（基底形）		音韻操作 回想派生時	回想形式（表層形）	
		語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/(i)ker/	なし	in	iker
四段	聞く	/kik/			kik	
サ変	為	/s((e))/			s	
カ変	来	/k((o))/		k		
上二	起く	/ok(i)/		i 削除	oki	ker
下二	受く	/uk(e)/			uke	
上一	着る	/ki/			ki	
下一	蹴る	/ke/			ke	

(7) 動詞の〈回想〉の意味を現すときの音素列

- a. 母音幹基-回想の接辞基：/~V/-/(i)ker/→i 削除→~V-ker-：母音幹-回想の接辞
- b. 潜母音幹基-回想の接辞基：/~(V)/-/i)ker/→i 削除→~V-ker-：母音幹-回想の接辞
- c. 重潜母音幹基-回想の接辞基：/~((V))/-/i)ker/→((V))削除→~C-iker-：子音幹-回想の接辞
- d. 子音幹基-回想の接辞基：/~C/-/(i)ker/→~C-iker-：子音幹-回想の接辞

3.3. 名詞・助詞・接辞に連なる形式

3.3.1. 連体形

動詞の連体形は表 24 のような形態を示す。これまでの分析で得た語幹基を活かすと、表 25 のような基底形の語幹基と表層形の語幹、接辞とが仮定できる。この段階では接辞基と音

韻操作は直ちには導けないため次の仮定が必要となる。つまり、これまでの分析と整合性を取るため動詞の語幹基と接辞基とが連なって語幹と接辞とが現れる際の音韻操作としては基底形の音素の削除を優先するというものである。この仮定に基づき表層形の接辞に着目すると連体形の接辞は **u**, **ru** 又は **uru** であると言える。最も長い音素列が **uru** であるからこれを接辞基として、これに音韻操作を施すことで接辞が現れると考える。また、表層形の語幹に着目すると **(V)r** 削除で削除されうる音素として、**()** で括った **i** や **e**, そしていわゆるカ変の **o**, サ変の **e** というのは、それぞれ潜母音、重潜母音と呼んだが、連体の接辞を後接するときにも削除されているということが分かるから、このときの音韻操作は「**(V)**削除」ということができる。（「**(V)r** 削除」は「潜母音」と「重潜母音」ともに削除するものとして再定義されたが、「**(V)**削除」も「潜母音」と「重潜母音」ともに削除するものとして定義しておく。）以上のことから表 25 は表 26 のように改められる。

ここで、音韻操作によって削除されうる接辞基の音素を **()** で括りたいが、接辞基に施されうる音韻操作には **ur** 削除と **u** 削除とがある。連体の接辞の前接の語幹基の末尾の音素が子音のときは **ur** 削除が、母音（潜母音と重潜母音とを除く）のときは **u** 削除が適用される。これらの削除規則によって削除されうる接辞基の音素は **u** または **ur** であり、これらの規則が適用される環境であれば語幹基の末尾の音素に関わらず **u** は削除され、語幹基の末尾の音素が子音のとき **r** も併せて削除されるということだから便宜上、接辞基に含まれる **ur** は **((u)r)** と表し連体の接辞基は **/((u)r)u/** と表す。従って表 26 は更に表 27 のように改められる。

表 24 動詞の連体形

活用型	動詞	連体形	活用型	動詞	連体形
四段	聞く	kiku	下一	蹴る	keru
上二	起く	okuru	カ変	来	kuru
下二	受く	ukuru	サ変	為	suru
上一	着る	kiru	ナ変	往ぬ	inuru

表 25 動詞の連体形の基底形と表層形

		連体形 (基底形)		音韻操作 連体派生時	連体形 (表層形)	
活用型	動詞	語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	?	?	in	uru
四段	聞く	/kik/			kik	u
サ変	為	/s((e)/			s	uru
カ変	来	/k((o)/			k	
上二	起く	/ok(i)/			ok	
下二	受く	/uk(e)/			uk	
上一	着る	/ki/			ki	ru
下一	蹴る	/ke/			ke	

表 26 動詞の連体形の基底形と表層形 (改)

		連体形 (基底形)		音韻操作 連体派生時	連体形 (表層形)	
活用型	動詞	語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/uru/	なし	in	uru
四段	聞く	/kik/		(接辞基の) ur 削除	kik	u
サ変	為	/s((e)/		(語幹基の) (V)削除	s	uru
カ変	来	/k((o)/			k	
上二	起く	/ok(i)/			ok	
下二	受く	/uk(e)/		uk		
上一	着る	/ki/		(接辞基の) u 削除	ki	ru
下一	蹴る	/ke/			ke	

表 27 動詞の連体形の基底形と表層形 (改) その 2

		連体形 (基底形)		音韻操作 連体派生時	連体形 (表層形)	
活用型	動詞	語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in/	/((u)r)u/	なし	in	uru
四段	聞く	/kik/		ur 削除	kik	u
サ変	為	/s((e)/		(V)削除	s	uru
カ変	来	/k((o)/			k	
上二	起く	/ok(i)/			ok	
下二	受く	/uk(e)/		uk		
上一	着る	/ki/		u 削除	ki	ru
下一	蹴る	/ke/			ke	

なお、早田（2017：20-21）によると「1969年7月にモリス・ハレ（Morris Halle）が初めて日本を訪れたとき、ハレの前で服部四郎は連体語尾は /uru/ だったに違いないという意見を表明した」ということであり、「連体形語尾と已然形語尾がそれぞれ /-uru/ と /-ure/ だったという考えは既に Donald Smith（1969）に提示されている」という。Donald Smith（1969：435-442）では潜在形（underlying forms）として、四段動詞、一段動詞、二段動詞の連体形・已然形について、それぞれ、「kik-uru」・「kik-urë」, 「mi-uru」・「mi-urë」, 「okï-uru」 「nakë-urë」・「okï-urë」 「nakë-urë」が仮定されている。また、早田（2017：91）は次のようにも述べている。「服部四郎の（上代語）連体接辞 uru 案の真意は分らぬが、考えてはみたいものである」とした上で「子音語幹に続く連体接辞を uru（已然接辞を uru-ai）とし、子音語幹に続く時に「ル脱落」が起こるとする筈であろう」と述べ、「一つの試案を提示しよう。連体形を ru でなく uru とするのは、直前に来る動詞語幹末母音を u にするためである。uru の u が来ると直前の語幹末母音を u に変える」と提案する。そして、「agai-《上げ》で、agai-uru → ag^əe-uru → aguru 《上ぐる》, 即ち通常は語幹末母音+母音接辞では母音が消える（例：agai-azu → ag^əe-azu → ag^əe-zu 《上げず》）。しかし、この u は消えずに前の乙類母音を u に変える（或いは直前の乙類語幹末母音と融合して u になる）。この u は今まで論じなかった終止接辞と同じ行動をとる（例：agai-u → ag^əe-u → agu 《上ぐ》）。すなわち（今後 u-ru とする）連体接辞 u-ru は終止接辞 u プラス ru と言えそうである」という。

しかしながら、この考え方は、/uru/ について前接する語幹基の特質に応じて、何も削除されないか、（先頭の）「u 削除」又は「ur 削除」が起きるかが決まると考えた私見とは異なり、「ル脱落」を想定して「終止接辞 u プラス ru」と捉えているが、もしそう考えるならば、連体形接辞になぜ終止接辞が含まれるのかという点に説明が必要であると思われる。この点からも、ur 削除の方が妥当であると言える。

西山（2012）は古語の終止形と連体形とを比較し動詞（二段，ナ変，カ変，サ変）において終止形に **ru** がついて連体形が形成されることを指摘し，**ru** を連体形語尾とする。動詞（四段，一段）で **ru** が出していない理由は音韻的なものと考えするという。西山は「これらの動詞の語根と終止形を比較すると，終止形の方が音節が1つ多い。例えば，**kak** は1音節だが **kaku** は2音節である。従って更に **ru** がつくると，語根との音節数の差は2つになる。一方，二段，カ変，サ変では語根と終止形の音節数は同じなので，**ru** が現れても，連体形と語根の音節数の差は1つである。つまり，語根と連体形で，音節数の差が2つ以上あつてはならない，という制約を仮定すれば，四段も一段も基底では **ru** であるが，音韻的制約により，これは表層に現れない，と説明できる」（下線部は著者による。）という一方で，注において「この制約は，ナ変動詞にはあてはまらない。連体形の「死ぬる」は語根の **sin-**より2つ音節が多いのに適格である。恐らくナ変動詞は元は二段動詞であったと考えられる。つまり，この動詞の語根は以前は母音で終わっていたのだが，その母音が脱落して子音で終わるようになった。しかし二段動詞の活用の残存として連体形語尾の **-ru** が残ったと考えられる。John Whitman 氏によれば，この仮説は歴史的に可能性はあるようである。」と述べる。また，連体形語尾の基底形について「ラ変では /u/ の方が派生がシンプルになる」が「ラ変以外では連体形語尾は **ru** なので，便宜上以下の説明では /ru/ を基底形として表記する」とし「ラ変の音節の数については，語根（**ar**）が1つで連体形（**aru**）が2つとなり，本稿で提案した音節数の制約に従っている」と述べる。ここでのナ変の例外処理にもやはり疑問が残る。それゆえ，この連体形形成の機序としては **ur** 削除の方が妥当である。

Frellesvig（2010）は，動詞の終止形（Conclusive），連体形（Adnominal），その他の形式の形成に関する形態論については，主に上代日本語の分析を通して詳細に論じているが，西暦700年から800年までの上代日本語（Old Japanese）を OJ，800年から1200年までの中古

日本語 (Early Middle Japanese) を EMJ とし、「屈折の範疇と形態の全体的な種類は、OJ と EMJ との間にそれほど違いはない。(The overall range of inflected categories and forms is not very different between OJ (cf. 3.1.3) and EMJ)」と述べている。その OJ の分析は、動詞の終止形と連体形の形成については、次のようにまとめることができる。すなわち、終止形は語幹 (Base) に *u* を附加して形成するが、その際、母音語幹動詞 (二段活用動詞) では、語幹末の母音削除が起きる。また、母音語幹動詞は、連体形語尾と詠嘆形語尾とを、終止形に接続する (The vowel base verbs attach the adnominal and exclamatory endings to the conclusive, rather than to the base.)。なお、詠嘆形とは伝統文法でいうところの已然形と同じ形式である。一方で、子音語幹動詞 (四段活用動詞) では連体形語尾 (*ru*) と詠嘆形語尾 (*re*) とは語幹に直に接続している。こうした分析は確かに、著者の指摘する母音削除規則 (二つの母音が集合するとき、第二の母音は $-(C)V-VCV-$ 、つまり、単音節形態素が母音始まりの多音節形態素によって後接される、という環境においてのみ削除される。それ以外の場合、第一の母音が削除される。) に適応する。しかしながら、子音語幹動詞の連体形/詠嘆形は終止形に *ru/re* が附加したもののだが母音語幹動詞の連体形/詠嘆形は語幹に *ru/re* が附加したものであるという構造上の差異の理由について明白な説明がなされていない点に疑問が残る。それゆえ、この説明に代わる連体形形成の機序として、*ur* 削除の方が妥当であると言える。

しかしまだ、私見にも一つの問題が残っている。いわゆるナ変の語幹基の末尾は子音の音素であるが、連体の接辞を後接して基底形から表層形に派生するとき、後接する音素列を全く削除しない。語幹基の末尾に子音を有するという点で共通する四段動詞の語幹基が後接する音素列 *ur* を削除することとは対照的である。このことはナ変の語幹基の末尾の子音と四段動詞の語幹基の末尾の子音とを区別する必要が生じていることを意味する。筆者は、いわゆるナ変の語幹基の末尾の子音は四段動詞のそれと比べて、後接する音素列を削除するとい

う影響力を持ち合わせていない、削除力が陰性であると捉えて「陰子音」(IN-Consonants)と呼ぶことにしたい。これまで音素を区別する際に削除されうるものを () で括ってきたが、それとは性質が異なることから、子音を C と表すことに対して陰子音についてはその音素の右肩に一の小さ字を附して C⁻ のように表す。そうすると表 27 は更に表 28 と改められる。そして (8) の規則が成り立つ。また、いわゆる「連体形接続」の助動詞 (の終止形)、断定の「なり」は、/-(u)r⁻unari/、比況の「ごとし」は、/-(u)r⁻ugotosi/ と分析でき、いずれも基底形が /((u)r⁻u~/ (～は音素列) という形式をとっていて連体の接辞 (基) と同様の規則を適用できる。これらを仮に「uru 系接辞基」と呼ぶ。ここで、表層形を成すに当たり動詞の語幹基の末尾の音素の種類によって接辞基の特定の音素が削除されるという規則について「潜母音 (及び重潜母音) 幹基-終止の接辞基」の場合は (V)r 削除がなされたことを踏まえると「子音幹基-連体の接辞基」の場合に ur 削除 (表現を変えれば Vr 削除) という音韻操作がなされても不思議ではない。なお、表 28 は表 29 のように改めると現代語の分析に適用できる。すなわち、ナ変の陰子音幹基が子音幹基に変わり、上二・下二の潜母音幹基が母音幹基に変わり、下一段の母音幹基が子音幹基に変わったとみると、それぞれが ur 削除の対象又は u 削除の対象となりそれぞれ削除規則が適用された結果、現代語の正しい連体形 (及び終止形) を派生する。更にいわゆる二段活用の一段化やナ変・下一の五段化についても語幹の種類の変化に起因すると仮定できる。このとき連体の接辞基も削除規則もそれ自体は変化しない。このことは本稿の語幹 (基) ・接辞 (基) の分類、音韻規則の妥当性を強める。

ところで、本稿では中古日本語を扱うため上代特殊仮名遣いを考慮せずに分析してきたが、本稿で提案した基底形の音素としての「母音幹基」末尾、「潜母音幹基」末尾、「重潜母音幹基」末尾の音素は、いわゆる上代特殊仮名遣いでは甲乙が区別された位置の音素でも

ある。このことは基底形の動詞語幹基末尾音素の5分類の妥当性を裏付けたと言えまいか。

表 28 動詞の連体形の基底形と表層形 (改) その 3

活用型		連体形 (基底形)		音韻操作 連体派生時	連体形 (表層形)	
		語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in̄/	/((u)r)u/	なし	in	uru
四段	聞く	/kik/		ur 削除	kik	u
サ変	為	/s((e))/		(V)削除	s	uru
カ変	来	/k((o))/			k	
上二	起く	/ok(i)/			ok	
下二	受く	/uk(e)/			uk	
上一	着る	/ki/		u 削除	ki	ru
下一	蹴る	/ke/			ke	

(8) 動詞の〈連体〉の機能を果たすときの音素列

- a. 母音幹基-連体の接辞基 : /~V/-/((u)r)u/ → u 削除 → ~V-ru- : 母音幹-連体の接辞
- b. 潜母音幹基-連体の接辞基 : /~(V)/-/((u)r)u/ → (V)削除 → ~C-uru- : 子音幹-連体の接辞
- c. 重潜母音幹基-連体の接辞基 : /~((V))/-/((u)r)u/ → (V)削除 → ~C-uru- : 子音幹-連体の接辞
- d. 子音幹基-連体の接辞基 : /~C/-/((u)r)u/ → ur 削除 → ~C-u- : 子音幹-連体の接辞
- e. 陰子音連体の接辞基 : /~C̄/-/((u)r)u/ → ~C-uru- : 子音幹-連体の接辞

表 29 現代語の動詞の連体形 (及び終止形) の基底形と表層形 (参考)

活用型		連体形 (基底形)		音韻操作 連体派生時	連体形 (表層形)	
		語幹基	接辞基		語幹	接辞
五段	蹴る	/ker/	/((u)r)u/	ur 削除	ker	u
	死ぬ	/sin/			sin	
	聞く	/kik/			kik	
サ変	為る	/s((e))/		(V)削除	s	uru
カ変	来る	/k((o))/			k	
上一	起きる	/oki/		u 削除	oki	ru
下一	受ける	/uke/			uke	
上一	着る	/ki/			ki	

また、ここで、なぜ kik-uru という母音-子音-母音-子音という一見何の問題の無い形式が

表層形に現れることなく、ur 削除が施されるかについて考察する。結論から言えば、同音衝突の頻度の軽減のためだと考える。表 30 は ur 削除を想定した形態的に正しい、8つの語形で、その異なり形式数は3である。表 31 は ur 削除を施す前の形態的に不適切な、8つの語形で、その異なり形式数は3である（表 30、表 31 ともに、削除された音素を小字で示している）。確かに、これらの表の全体の異なり形式数は、どちらも3であり、終止形の異なり形式数は、どちらも2である。しかしながら、連体形に着目すると、4種の単語について、ur 削除の施されない体系における異なり形式数が2であるのに対し、ur 削除の施される体系における異なり形式数は3である。このことから、ur 削除が施されると同音衝突の頻度が軽減されるということが分かる。これは、ur 削除が言語産出及び言語理解の弁別性における経済性の向上に寄与する合理的な操作であることを裏付ける。

なお、Frellesvig (2010 : 96-97) では上代日本語 (OJ) の語数についてではあるが、全動詞の 75%は子音語幹動詞の四段活用動詞のもの、全動詞の 20%は母音語幹動詞の下二段動詞のもの、全動詞のうち約 30 語は母音語幹動詞の上二段動詞のものが占めるとされており、中古日本語においてもおおよそ同様であるとする、動詞の 95%以上の規模の語に関わる弁別性における経済性は、決して無視できない重大なものであろう。

表 30 動詞の同音衝突の軽減に成功している体系

活用型	表層形	語幹	終止形(Vr 削除あり)		連体形 (ur 削除あり)	
カ行四段	置く	ok	ok- <small>r</small> u	①	ok- <small>ur</small> u	①
カ行上二段	起く	ok(i)	ok _i - <small>r</small> u	①	ok _i - <small>uru</small>	②
ラ行四段	送る	okur	okur- <small>r</small> u	②	okur- <small>ur</small> u	②
ラ行下二段	遅る	okur(e)	okur _e - <small>r</small> u	②	okur _e - <small>uru</small>	③

表 31 動詞の同音衝突の軽減に失敗する体系

活用型	表層形	語幹	終止形(V _r 削除あり)	連体形 (ur 削除なし)
カ行四段	置く	ok	ok _{-r} u ①	*ok-uru ②
カ行上二段	起く	ok(i)	ok _{i-r} u ①	ok _i -uru ②
ラ行四段	送る	okur	okur _{-r} u ②	*okur-uru ③
ラ行下二段	遅る	okur(e)	okur _{e-r} u ②	okur _e -uru ③

3.4. いわゆる係助詞「こそ」に呼応する文終止（係結びの結び）を導く形式

3.4.1. いわゆる「已然形」

動詞のいわゆる已然形は表 32 のような形態を示す。表 32 から分かる動詞のいわゆる已然形と連体形の形態上の相違は、末尾の音素が前者は e であるのに対して、後者は u であるという点のみである。従って、いわゆる已然形と連体形とは同様な分析が施せる。よって、動詞の已然形の基底形と表層形は表 33 のようになり、規則 (9) が成り立つ。

表 32 動詞の已然形と連体形

活用型	動詞	已然形	連体形
四段	聞く	kike	kiku
上二	起く	okure	okuru
下二	受く	ukure	ukuru
上一	着る	kire	kiru

活用型	動詞	已然形	連体形
下一	蹴る	kere	keru
カ変	来	kure	kuru
サ変	為	sure	suru
ナ変	往ぬ	inure	inuru

表 33 動詞のいわゆる已然形の基底形と表層形

活用型 動詞		已然形 (基底形)		音韻操作 已然派生時	已然形 (表層形)	
		語幹基	接辞基		語幹	接辞
ナ変	往ぬ	/in ⁻ /	/((u)r)e/	なし	in	ure
四段	聞く	/kik/		ur 削除	kik	e
サ変	為	/s((e)/		(V)削除	s	ure
カ変	来	/k((o)/			k	
上二	起く	/ok(i)/			ok	
下二	受く	/uk(e)/		uk	re	
上一	着る	/ki/		ki		
下一	蹴る	/ke/		u 削除	ke	

(9) いわゆる已然形のための音素列

- a. 母音幹基-已然の接辞基： $/\sim V/ - /((u)r)e/ \rightarrow u$ 削除 $\rightarrow \sim V-re$ ：母音幹-已然の接辞
- b. 潜母音幹基-已然の接辞基： $/\sim(V)/ - /((u)r)e/ \rightarrow (V)$ 削除 $\rightarrow \sim C-ure$ ：子音幹-已然の接辞
- c. 重潜母音幹基-已然の接辞基： $/\sim((V))/ - /((u)r)e/ \rightarrow (V)$ 削除 $\rightarrow \sim C-ure$ ：子音幹-已然の接辞
- d. 子音幹基-已然の接辞基： $/\sim C/ - /((u)r)e/ \rightarrow ur$ 削除 $\rightarrow \sim C-e$ ：子音幹-已然の接辞
- e. 陰子音幹基-已然の接辞基： $/\sim C^-/ - /((u)r)e/ \rightarrow \sim C-ure$ ：子音幹-已然の接辞

ここで、Frellesvig (2010) がいわゆる「已然形」を「詠嘆形」(Exclamatory) としていることになり、「こそ」の結びは「詠嘆形」と呼ぶことにする。更に、「こそ」の結びはいわゆる「已然形」で結ぶ形式の現れる以前に、「連体形」で結ぶ形式が成立していたこと(鶴 1963 他)、已然形は「連体形+何か名詞的なもの」と考えられること(早田 2017 : 85-86)を踏まえると、「詠嘆形」は「連体形」に何らかの接辞基——本稿では「詠嘆の接辞基」 $/-e/$ とする——が後接した形式と考えることができる。その時の音韻操作を(10)のように仮定して、(9)から改定する。

(10) 動詞の〈詠嘆〉の意味を表すときの音素列

- a. 母音幹基-連体の接辞基-詠嘆の接辞基
： $/\sim V/ - /((u)r)u/ - /e/ \rightarrow u$ 削除 $\cdot u$ 削除 $\rightarrow \sim V-r-e$ ：母音幹-連体の接辞-詠嘆の接辞
- b. 潜母音幹基-連体の接辞基-詠嘆の接辞基
： $/\sim(V)/ - /((u)r)u/ - /e/ \rightarrow (V)$ 削除 $\cdot u$ 削除 $\rightarrow \sim C-ur-e$ ：子音幹-連体の接辞-詠嘆の接辞
- c. 重潜母音幹基-連体の接辞基-詠嘆の接辞基
： $/\sim((V))/ - /((u)r)u/ - /e/ \rightarrow (V)$ 削除 $\cdot u$ 削除 $\rightarrow \sim C-ur-e$ ：子音幹-連体の接辞-詠嘆の接辞

d. 子音幹基-連体の接辞基-詠嘆の接辞基

: /~C/-/((u)r)u/-e/ → ur 削除・u 削除 → ~C-φ-e : 子音幹-連体の接辞-詠嘆の接辞

e. 陰子音幹基-連体の接辞基-詠嘆の接辞基

: /~C⁻/-/((u)r)u/-e/ → u 削除 → ~C-ur-e : 子音幹-連体の接辞-詠嘆の接辞

ここで、(10d) の連体の接辞は、その接辞基末の母音連続を回避するべく /u/ が削除されているもので、つまりこの音素 u が潜在化しうるものであることから、連体の接辞基の表記を /-((u)r)u/- から /-((u)r)(u)-/ に改める。

また、詠嘆の接辞基 /-e/ のみならず、いわゆる「已然形接続」の助詞は動詞の「連体形」に各機能を持った接辞基が後接したものと捉え直すことができ、例えば、いわゆる順接確定の「ば」は動詞の「連体の接辞基」に /-eba/、逆接確定の「ど」、「ども」は「連体の接辞基」にそれぞれ /-edo/、/-edomo/ が後接したものと設定できる。ここで、すでに「uru 系接辞基」としていた、いわゆる「連体形接続」の助動詞（の終止形：断定の「なり」 /-((u)r)unari/、比況の「ごとし」 /-((u)r)ugotosi/）についても、それぞれ、「uru 系接辞基」というよりもむしろ、「連体の接辞基」に /-nari/、「連体の接辞基」に /-gotosi/ が後接したものとして、再整理する。これら /-nari/ や /-gotosi/ は、/-eba/、/-edo/ や /-edomo/ と共に「連体形系」の接辞基と呼ぶことにする。そのうち、/-eba/、/-edo/ といった接辞基の先頭の音素に /e/ を持つものを、「e 系接辞基」と呼ぶ。

3.5. 私見のまとめ

3.5.1. 動詞の語幹（基）及び接辞（基）の分類と諸形式の形成の機序

前節の議論を踏まえ筆者は、動詞の語幹（基）について、その語幹（基）末の音素から 5

種に分類し、表記上の規則を設ける（表 34）。また、これまでの議論で仮定した音韻操作と削除される音素の関係は表 35 のような表で把握できる。中古日本語の動詞の語幹と接辞の基底形は、その末尾の音素により 5 種類に、動詞の接辞や動詞の接辞に連なる接辞の基底形は、その先頭の音素により 7 種類に分類できた。動詞の語幹基とそれに後接する接辞基との組合せに対応する音韻規則によって、動詞の語幹とそれに後接する接辞との連なった形式としての表層形を正しく生成できる。なお、本稿ではいわゆるラ変は存在詞として動詞語幹から除外している。

黒木（2012）は「後接する動詞接尾辞に合わせて交替する」の動詞語幹を「複語幹動詞」、それ以外のものを「単語幹動詞」と呼んだ。本稿はこの区別を認める立場を取りつつ、その「複語幹動詞」の語幹を、基底レベルで分析して「陰子音」、「重潜母音」、「潜母音」という 3 種の語幹基に収斂した。すなわち本稿は、いわゆる二段動詞、変格動詞の語幹の認め方として、表層レベルにおいて各動詞は複数の語幹を持つが基底レベルにおいては単一の語幹基を持つとする立場を取る。

表 34 動作動詞の語幹（基）の分類と表記上の規則

語幹（基）の分類	語幹基末の音素の表記	学校文法用語	例語と語幹基
子音幹（基）	そのまま記す	四段	「聞く」/kik/
陰子音幹（基）	ゝを附す	ナ変	「去ぬ」/in ^ゝ /, 「死ぬ」/sin ^ゝ /
重潜母音幹（基）	(())を附す	カ変, サ変	「来」/k((o))/, 「為」/s((e))/
潜母音幹（基）	()を附す	上二段, 下二段	「起く」/ok(i)/, 「得」/(e)/
母音幹（基）	そのまま記す	上一段, 下一段	「着る」/ki/, 「蹴る」/ke/

表 35 動詞語幹基と接辞基の組合せに係る音韻操作の規則の表

		後接要素	(文終止)		接辞			名詞等	(係結びの文終止)	
			命令	終止	a系	i系	C系			
活用型	語幹基末音素	接辞基	/e/	/r)u/	/a)z/	/i)ke r/	/s)as (e)/	/r)ar (e)/	/((u)r)(u)/	連体形系 詠嘆
			/yo/	/Ø/	音韻操作 (削除される音素を記載)					
ナ変	/~C~/	/	r	/	s	r	/	u (連体の接辞基末)		
四段	/~C~/		ur	ur-u						
カ変	/~(V)/		(V)r	a	((V))	/	(V)			
サ変			i							
二段	/~(V)/		/	u (連体の接辞基頭)						
一段	/~V/		/							

4. まとめ

以上、本稿においては、生成音韻論的分析手法を用いて、動詞（いわゆるラ変を除く。）の語幹とそれに後接する接辞とについて、それぞれに、その基底形と（基底形同士の組合せに一対一に対応する）音韻規則を想定しさえすれば、表層形の音素列を生成し、正しく語幹を抽出することができるかと論じた。すなわち「どこまでが動詞の語幹で、どこからが屈折語尾なのか」について、その境界を厳密に、基底形でも表層形でも規定できた。

今後の課題は、動詞以外の語についても本稿の枠組みを活用して形態論的体系を再構築し、それが共時的にも通時的にも有用だと証明した上で、学校文法を更新することである。

参照文献

Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge : Cambridge University Press.

Smith, Donald L. (1969) On the non-trivial role of the *otsu* Vowels in Old Japanese verb inflections. *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society*, April 18-19, 1969, pp.435-442

井上史雄 (1998) 「I ラ抜きことばの背景」『日本語ウォッチング』2-31. 東京：岩波書店

大木一夫 (2010) 「古代日本語動詞の活用体系——古代日本語動詞形態論・試論」東北大学大学院文学研究科 (編) 『東北大学文学研究科研究年報』59 : 1-36.

影山太郎 (2019) 「日本語の述語膠着とモジュール形態論」岸本秀樹・影山太郎 (編) 『レキシコン研究の新たなアプローチ』1-25. 東京：くろしお出版

清瀬義三郎則府 (1971) 「連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論」『國語學』86 : 42-56.

清瀬義三郎則府 (2013) 『日本語文法体系新論——派生文法の原理と動詞体系の歴史』東京：ひつじ書房

黒木邦彦 (2012) 「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」丹羽一彌 (編) 『日本語はどのような膠着語か——用言複合体の研究』104-137. 東京：笠間書院

黒木邦彦 (2015) 「清瀬義三郎則府著『日本語文法体系新論——派生文法の原理と動詞体系の歴史』」『日本語の研究』11 (4) : 35-42.

児倉徳和・久保智之 (2021) 「日本語の隣人たちⅡ——Ⅳ シベ語の世界」中川裕 (監修)・小野智香子 (編) 『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣人たちⅠ＋Ⅱ』

- [合本]』Ⅱ, 72-91. 東京：白水社
- 小学館国語辞典編集部（編）（2005）『精選版日本国語大辞典』東京：小学館
- 坪井美樹（2014）「活用（古典語）」日本語文法学会（編）『日本語文法辞典』114-117.
東京：大修館書店
- 西山國雄（2012）「活用形の形態論，統語論，音韻論，通時」三原健一・仁田義雄（編）
『活用論の前線』153-189. 東京：くろしお出版
- 丹羽一彌（2012）「動詞述語語幹の構造」丹羽一彌（編）『日本語はどのような膠着語か——
一用言複合体の研究』48-65. 東京：笠間書院
- 野田尚史（2014）「活用」日本語文法学会（編）『日本語文法辞典』108-111. 東京：大修
館書店
- 早田輝洋（2017）『上代日本語の音韻』東京：岩波書店
- 福田嘉一郎（2019）『日本語のテンスと叙法——現代語研究と歴史的研究』大阪：和泉書院
- 松村明・山口明穂・和田利政（編）（2015）『旺文社古語辞典〔第10版増補版〕』東京：
旺文社
- 宮岡伯人（2015）『「語」とはなにか・再考——日本語文法と「文字の陥穽」』東京：三省
堂
- 村木新次郎（2014）「語幹」日本語文法学会（編）『日本語文法辞典』224-225. 東京：大
修館書店
- 山田孝雄（1948）『日本文法学概論 3版』東京：宝文館
- 李林静（2021）「日本語の隣人たち——Ⅲ ホジェン語の世界」中川裕（監修）・小野智香
子（編）『ニューエクスプレス・スペシャル 日本語の隣たちⅠ＋Ⅱ [合本]』Ⅰ, 48-
65. 東京：白水社

利益相反に関する開示

本稿は著者が所属機関とは無関係に私的に作成したものである。その他、本稿に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

*責任著者 Koji DOI (Okayama Prefectural Niimi Senior High School)

le421104@s.okayama-u.ac.jp